

中野思子淵神社の神事 行事の概要

滋賀県高島市安曇川町中野にある中野思子淵（しこぶち）神社では、毎年、12月の第1日曜日と、1月の第2日曜日に神事（じんじ）と呼ばれる行事が行われています。

神事は、お供え物を作っておひつに詰め、それを背負って運び、稚児とともに、神社に参拝する行事です。

神事の準備は、おひつに巻くしめ縄作りから始まります。

集落内で作られる糯米の藁を使い、神事の前日にしめ縄を綯います。

お供え物は特有のもので、「煮た小豆を箱に詰めたもの」、「炊いた糯米を四角く成型したもの」、「茹でた里芋に大豆のぬたをまぶしたもの」、「秋刀魚2尾」、で、すべて味付けはされません。

1月の神事ではこれに加え「親芋と大根の輪切りを藁で結んだもの」、「榊の小枝4本」、も詰めます。

お供え物は4つのおひつに詰められ、4人の運び手（男性）が背負います。

本来、稚児も女兒4名が必要とされていますが、近年は少子化により揃わず、できる人数で実施しています。

お供え物の準備作業は、昔は輪番で各家で行われていましたが、現在は集落の公民館（草ノ根ハウス）で行われます。お供え物は公民館から神社まで、集落内を歩いて運ばれます。

お供え物と稚児の関わりを示す儀式として、公民館を出発する時と、神社に到着した時、稚児が頭に藁の輪をかぶりお供え物の下に入る、ということが行われます。これが何を意味するのか知る人は居ませんが、頭上運搬の名残を示すものではないかと思われます。

神社まで運ばれたお供え物は、3つの社（思子淵神社、八幡神社、稲荷神社）に供えられます。

宮総代（集落の男性が輪番で務める）によって祝詞があげられ、その場にいる全員で参拝を行います。

参拝後、お供え物はすぐに下げられ、もと来た道をたどって公民館に持ち帰られます。

公民館へ帰ると、お下がりに関係者みんなに分配する作業が行われます。少し前までは集落全戸に分配できる量が作られていました。神事は、寒い時期に栄養のある食物を、お下がりという形で分配し、貧しい者を救済する仕組みでもあったことが窺えます。

作業の後には、参加者で直会（なおりい）が行われ、集落住民の楽しい交流の機会になっています。



1 糯米の藁を整えて叩き、おひつに巻くしめ縄を綯います。



2 おひつの上め縄にしめ縄をつけ、その間に紙垂(しで)をつけます。



3 お供え物の煮炊きは女性が行いますが、



4 煮炊きより後のお供え物の準備は
古来より、男性のみが行うことになっていました。



5 炊いた小豆を半分ほど潰し、木箱に詰めます。



6 炊いた糯米を半分ほど潰し、木杵に詰めて四角く成型します。



7 里芋を入れる「ぬた籠」を藁と麻木で作ります。



8 茹でた里芋に大豆のぬたをまぶし「ぬた籠」に入れます。



10 1月は榊の小枝4本もおひつに入れます。



11 1月は「親芋と大根の輪切りを藁で結んだもの」も入れます。



12 1月のお供え物



13 神事に参加した人と稚児の名前を記録します。



14 藁のむしろと縄を使っておひつを背負います。



15 公民館出発時、稚児が藁の輪をかぶっておひつの下に入ります。



16 運び手と稚児は集落の中を歩いて、神社に向かいます。



18 神社到着時にも同じ儀式が行われます。



19 宮総代らとともに、各神社にお供え物を供えます。



20 宮総代により祝詞があげられ、参拝します。



21 参拝後、お下がりはずぐに関係者に分配されます。



22 行事の後、関係者で直会が行われます。